

キルケゴール『反復』の成立と構成について  
—— 仮名の問題を手がかりに

# キルケゴール『反復』の成立と構成について

## —— 仮名の問題を手がかりに

On the composition and construction of kierkegaard's Repetition :  
From the problem of his use of pseudonym

小野 雄介

はじめに

1843年10月16日、キルケゴールは三冊の著作、『反復』『おそれとおののき』『三つの教化的講話』を同時に出版した。『三つの教化的講話』はキルケゴールの実名が著者名として用いられているが、『反復』と『おそれとおののき』ではそれぞれコンスタンティン・コンスタンティウス、沈黙のヨハネスという仮名（かめい）の著者名が用いられている。キルケゴールは生涯にわたり、このように実名と仮名とを使い分けて著作を出版し続けた。

キルケゴールの仮名使用はペンネームのような性格のものではない。『反復』には、コンスタンティン・コンスタンティウスと若者というふたりの仮名人物が登場し、互いに影響を与え合いながら反復を探究していく。キルケゴールはまったく性格の異なるふたりの人物を創造し、彼らがいくつかの事件に遭遇する姿を描くことを通じて、自らの思想を提示しようとしている。キルケゴールの仮名作品はさながら文学作品のように構成されているのである。

この論文では、『反復』における仮名使用を分析することで、仮名著者による多層的な構成が、キルケゴールの思想を表現する上で不可欠であったことを示したい。そしてまた、仮名人物を用いた著述方法は、キルケゴールが提示しようとした新しい哲学概念「反復」と密接な関係にあることも考えたい。

キルケゴールからの引用はE・ヒルシュらのドイツ語版全集を使用し私が訳した。引用元はデンマーク語著作全集第一版の巻数とページ数によって示した。例えばⅢ 243は第三巻の243ページである。原文のイタリックやゲシュペルト、傍点による強調はすべて、訳文では下線によって示した。

## 序論

ここでは仮名使用が単にキルケゴールが書いたということを隠す匿名性のためだけになさ

れたのではないことを示すため、『反復』のあらすじを辿りながら、仮名使用がどのように機能しているのかをみていく。

『反復』冒頭でコンスタンティン・コンスタンティウスは、現代哲学において重要な役割を演じるだろう新しい概念として、反復を提示する。反復は想起や期待と比較され、現実を豊かに捉え生を充実させるものであることが説明される。しかしここでは十分な説明がなされず、読者はただ漠然と反復概念の輪郭を知りうるのみである。

続いてコンスタンティウスは一年前に起こったある若者の恋物語を語り起こしていく。ある日コンスタンティウスは若者から、若者が恋をしていること、そして恋をしている娘に愛を伝え、愛が受け入れられたことを打ち明けられる。それまでは若者からメランコリックなものを引き出そうとしていたコンスタンティウスは観察者であることをやめ、若者の恋をあたたかく見守っていきこうと決心する。ところが若者がポール・メラール<sup>i</sup>の詩を繰り返し声に出し、涙ぐんでいることに気づく。それは「年老いた恋人」という詩で、かつての不幸に終わった初恋の相手を年老いた男が訪ねるという内容である。コンスタンティウスは若者の恋が想起の恋であることを直ちに見抜く。コンスタンティウスの分析によれば、想起はかつてあったものを想起するだけではなく、現在を過去へと遠く押しやって、それを懐かしむという奇妙な場合もあるのである。この場合若者は、はじめの時点ですでに全関係を終えてしまっていて、「もし娘が明日死んでも、なんら本質的な変化を引き起こさない」(Ⅲ 179)ほど危険な状態に陥っているのである。

若者は次第に憂鬱を深めていく。娘に愛を打ち明けたにもかかわらず、愛の対象は現実の娘ではないという欺瞞の中で、若者は責めを感じ身動きができなくなってしまったのである。

若者がかつての状態に戻れるように、コンスタンティウスはさまざまな提案を行う。『反復』の副題は「実験的心理学の試み」であるが、提案を通じてコンスタンティウスは、若者の心理がどのように動き、反復は可能であるのかを観察しようとする。ところがこの実験に耐えられなくなった若者はコンスタンティウスの前から姿を消し、失踪してしまう。

若者の恋に続き、コンスタンティウスのベルリンへの反復実験旅行のことが語られる。かつて行ったことがあるベルリンへ再び旅行することで、反復が可能かどうか確かめられるのではないかと思いついたコンスタンティウスは、すぐにベルリンへと出発する。しかし、コンスタンティウスの思惑はことごとく裏切られ、反復実験旅行は失敗に終わる。結局、若者に反復の素晴らしさを説いたコンスタンティウス自身が、実験旅行を経て反復が不可能であるということを思い知らされる。コンスタンティウスは生を、決して同じ響きを出させることができないという郵便馬車のラッパに例え、生は二度同じ事を繰り返せないからこそ無限の可能性があって素晴らしいのであり、反復は不可能だと結論付けてしまう。

こうして反復を諦めたコンスタンティウスのもとに失踪していた若者からの手紙が届き八通が紹介される。失踪した後も独自に反復を探求していた若者は、旧約聖書のヨブに反復を

見出す。そして最後の手紙の中で、若者は反復を得たと報告する。ある日、新聞でかつての恋人が結婚したことを知った若者は、雷に打たれたような衝撃を感じ、恋に悩み失っていた自己自身を取り戻すことができたという。このような精神的な反復こそ唯一可能な反復であると主張して若者の手紙は結ばれる。

最後にコンスタンティウスによるあとがきが置かれ、若者の反復に対して冷静なコメントがされる。若者の反復が本当の反復であるのか疑問が残るが、コンスタンティウスが提示したかったのは若者の心理の動きであるので、読者は若者の心理に注目しながら反復について見極めてほしい、と『反復』は結ばれる。

『反復』のこのような構成をみると、キルケゴールの仮名使用が単なる匿名性以上の意味を持つように思われる。著者であるコンスタンティウスに加え、もうひとりの仮名著者という若者のふたりが、互いに影響を与えあいながら反復を求めていく。しかし、キルケゴールはなぜこのような著述方法を取らねばならなかったのだろうか。この論文では、キルケゴールの仮名使用がどのような効果を挙げているのかを分析することで、仮名著者による多層的な構成が、反復という新しい概念を表現する上で不可欠であったことを示したい。

## 第1章 仮名使用の目的

同日に出版された著作にもかかわらず、『反復』の著者名と『三つの教化的講話』の著者名とが仮名と実名とで使い分けられ、『反復』と『おそれとおののき』とでは異なる仮名の著者名が用いられている。このような仮名の使用は、これらの著作に限ったものではなく、キルケゴールのほとんどすべての著作で行われている。実名と仮名との使い分けに関しては、純粋にキリスト教的・教化的な内容を持つ講話などには実名が用いられ、美学的・哲学的内容を持つ創作的著作には仮名が用いられている、ということができる。ここでは、キルケゴールの仮名使用がどのように解釈されてきたのかを確認しながら、仮名使用の目的が何であったのかを考えていきたい。

和辻哲郎はキルケゴールの仮名使用について次のように述べている。

彼はおのれの体験に即してのみ思索する。しかもおのれの内部を露出させることは極度に恥じた。この矛盾が匿名の原因であろう。彼はこれによって特に個人的問題を普遍化し得ると信じたのであろう。<sup>ii</sup>

キルケゴールの問題の多くが自身の個人的体験から生じたものであり、実際に、キルケゴールの家庭問題や恋愛問題がほとんどそのまま著作中に取り上げられていることも多い。そのため仮名使用の理由には、名を伏せるという匿名性を目的とした面があったことは確かであると思われる。それは和辻が述べるように「おのれの内部を露出させること」を避けるため

でもあったであろうし、また、特に恋愛問題に関しては、レギーネ・オルセン に対する配慮もあったであろう。しかし、仮名使用の目的が単に匿名性のためだけではなかったと考えられる点がふたつある。

ひとつは、単に匿名性を目的としたと考えるには、キルケゴールの仮名使用はあまりに複雑で周到であるという点である。例えば、仮名著作には、ひとつの著作の中に複数の仮名人物が登場する場合がある（『あれか - これか』『反復』『人生行路の諸段階』など）。また、複数の仮名人物の手記や論文をさらに別の仮名人物がまとめて出版したという設定の著作もある（『あれか - これか』『人生行路の諸段階』）。さらには、一度使用した仮名人物たちを再登場させ、仮名人物たちが酒を飲み交わしながら議論するという設定の著作まである（『酒中に真あり』）。このように、キルケゴールの仮名著作はかなり手の込んだものである。仮名人物がそれぞれ細かく性格づけされており、仮名人物の主張をそのまま単純にキルケゴール自身の主張であるとすることはできない点からみて、仮名使用の重点は匿名性とは別のところにあったと考えることができる。

また、仮名使用の目的が単に匿名性のためだけではなかったと考えられる点がもうひとつある。キルケゴールは 1846 年に出版した『哲学的断片へのあとがき』の中で、それまでの仮名で発表された作品が自分の手によることを明らかにするのであるが、それ以降も周囲に真の著者が自分であることを知られながら、なお仮名著者による著作の発表を行っているのである。つまり、『哲学的断片へのあとがき』以降の仮名著作からは仮名使用の匿名性という意味はなくなっているにも関わらず、キルケゴールは仮名を使用し続けたのである。そのため、仮名使用の最大の目的は、匿名性ではなかったと考えることができるだろう。

『哲学的断片へのあとがき』での仮名使用の告白に注目して、小川圭治は次のように述べている。

後期の著作になっても、『死に至る病』など仮名の著書と『講話』の形の本名の著書の二種類があるが、すでに『あとがき』の巻末に書店の通告のような形でそえられた S・キルケゴール署名の「最初にして最後の言明」で、美的著作の仮名はすべて彼自身のものであることを宣言しているので、もはや著者がその背後に隠れるという意味の仮名ではない。また仮名にした場合でも、刊行者として自分の名前もかならず入れるようになった。（中略）仮名の意味がまったくかわってしまったのである。<sup>iii</sup>

小川は『哲学的断片へのあとがき』を転換点とし、キルケゴールの著作活動を前期と後期に分類している。そして前期と後期の著作活動の性質の異なりを次のように指摘している。

キルケゴールの側にも、はじめの計画にはなかった後期の著作を書きつづけなければならぬ必然性が生じてきた。『視点』<sup>iv</sup>では、それを次のような言葉でいいあらわしている。

「私は左手で世間に『あれか・これか』をさし出し、右手で『二つの建德的講話』をさし出したが、すべての人、あるいはたいていの人は右手で私の左手のものをつかみとった。」

すなわちキルケゴールは、はじめは仮名による美的著作と本名による宗教的著作との二重性によって、問いと答えの実存弁証法的構成を考えたのである。ところが世間の人、問いの方をまともな答えであるかのように受けとって、『あれか・これか』第一部の「誘惑者の日記」はすばらしいと本気で称賛したのである。(中略)そこでキルケゴールは、彼がほんとうにいいたいと考えていた答えの方、つまり厳密な意味でのキリスト教を、上から、明確に、直接的に語らざるを得なくなったのである。<sup>v</sup>

小川が指摘するように、後期の著作では、仮名と実名の使い分けが明確ではなくなっている。そして前期の著作のように、複数の仮名人物が登場する複雑で文学的な構成は試みられなくなっている。だが、後期に至ってもなお、キルケゴールが仮名使用を続けていることは注目に値するだろう。そしてまた、キルケゴールの前期の著作は、仮名による問いと実名による答えの二重性を持っているという小川の指摘は非常に重要である。小川はキルケゴールの複雑な仮名使用の理由をレギーネへの配慮によると解釈している<sup>vi</sup>。

しかし先にも述べたように、キルケゴールの仮名使用があまりにも複雑に周到になされている点や、仮名使用が後期の著作でも続けられている点を考慮すると、レギーネへの配慮という解釈だけでは納得することができない。むしろ、キルケゴールは自身の名前を隠すために仮名を用いねばならなかったのではなく、自身の思想を表現し読者に伝えるためには仮名を用いる必要があったのではないかと私は考える。つまり、仮名使用という方法は、読者への「問い」のために必然的に要請された方法だったのではないだろうか。以下では、梶田啓三郎によるキルケゴールの著述法の解釈を参考に、仮名使用が必要不可欠であったことを示したい。

先に述べたように、『反復』の副題は「実験的心理学の試み」であるが、梶田はこの「実験」が意味するのは、「間接的伝達」のことであると述べている。梶田は間接的伝達を次のようなものと述べている。

ここに実験といわれているのは「伝達形式」のことで、キルケゴール独特の「間接的伝達」の一つである。著者が著書でその真実と思うところを読者にじかに伝えて納得させる直接的伝達とは違って、著者が読者との間に実験という介在物を置いて両者を引き離し、飛び越えることのできない深淵を設けて直接に理解しあうことを不可能にする。だから伝えられる真実は実験を介して間接的に理解するよりほかに手だてはなくなる。<sup>vii</sup>

つまり、著者にとっての真実を読者が受け取るだけの直接的伝達ではなく、著者の実験がきっかけとなり、読者が自分自身の力で真実をつかみとるような伝達が間接的伝達であり、このような方法をキルケゴールは重要視したというのである。和辻は、キルケゴールは「おのれの体験に即してのみ思索する」のであり、それによって「個人的問題を普遍化」させると述べていたが、これこそ実験や間接的伝達のことであると考えられる。つまり、著者が述べる個人的体験が読者の個人的体験と重ねられ、読者がその体験の中に普遍的な問題を見出すことで、読者自らがその問題を問い、真理をつかみとることを目指しているのである。

キルケゴールの著作は「問い」であるという小川の指摘、および、キルケゴール独特の表現方法は「間接的伝達」であるという梶田の指摘を参考に、キルケゴールの仮名使用の目的は次の点にあると私は考える。

実験や間接的伝達を重視するということは、読者との関係を重視するということであり、どのようにして読者を真理への問いに導くことができるのかが重要となる。また、いかに多くの読者を主体的な真理への問いに導くことができるかということも重要である。そのため、間接的伝達の成否は、そこでなされる実験が読者の関心を引くかどうかということにかかっていたと考えられる。そこで、さまざまなタイプの実験を試みる必要から、多くの仮名著者が必要となったのではないだろうか。仮名著者はそれぞれ異なった思想や生き方を持っているのであるから、そこでなされる実験も多様なものになる。それは結果的にさまざまなタイプの読者の関心を引き、読者の内省を促し、その読者が主体的に自ら実験を生きて真理をつかみとることにつながりやすくなる。仮名著作において、キルケゴールは読者に「答え」を提示しようとしたのではない。複数の仮名人物たちによって提示される多様な問題、主張、意見、人生観に翻弄されながら、読者が主体的に「問い」を見出し、「答え」へと向かっていくことを求めたのである。この例として、『反復』において、キルケゴールの実験はどのように機能しているのかをみていく。

『反復』では、コンスタンティウスはベルリン旅行を通じて反復を探求し、若者は恋愛事件を通じて反復を探求していく。コンスタンティウスが反復しようとするのはかつて行ったベルリン旅行での享楽であり、若者が反復しようとするのは恋愛事件によって喪失してしまったかつての自己である。反復がどのような概念であるのか冒頭で簡単にはのめかされただけの読者は、コンスタンティウスと若者によってまったく異なる角度から試みられる反復の実験を読み進めることで、反復がどのようなものであるか自ら考えるように求められる。読者の関心がベルリン旅行と恋愛事件のどちらに向いても、反復を問うきっかけとなるように『反復』は書かれているのである。

また、コンスタンティウスは結局、反復は不可能であると述べることになるのだが、これはキルケゴール自身の思想とは異なると思われる。キルケゴールはのちの著作『哲学的断片』や『不安の概念』で反復を重要な概念として扱っているが、そこでは反復は精神的なもの、内的なものとされている。それに対し、コンスタンティウスが反復しようとしたのはかつて



行ったベルリン旅行での享樂であり、それはいわば外的なものの反復である。コンスタンティウスの反復がキルケゴールの思想と異なることは、キルケゴールが遺稿の中でコンスタンティウスの反復を「すべて冗談であるか、それとも相対的な真理でしかない」と述べていることから明らかである<sup>viii</sup>。だがこのように自らの意に反する思想を提示したのは、実験の効果を高めるために意図的になされたことなのである。というのも、キルケゴールの仮名著作においては、その仮名人物が直接的に述べることが重要なのではなくて、仮名人物の主張を通じて、共感や反発など、さまざまな効果を読者の中に引き起こし、読者が主体的に著作に関わってくることが重要なのであるから。キルケゴールが仮名を使用した理由、そして、さまざまな仮名著者を使い分けた理由は、そのことによって実験を多様なものにし、間接的伝達によってさまざまなタイプの読者を主体的に真理をつかみとることへと導くためだったのである。

このように、キルケゴールの仮名使用は単なる匿名性にとどまらず、キルケゴールの思想表現に不可欠であったことを示しえたように思う。キルケゴールがさまざまな仮名人物を用いた目的は、仮名人物たちの異なる主張や意見の中で、読者が主体的に問い、答えを求めるよう促すことにあったのである。

キルケゴールは読者の主体性を重視しているが、これはキルケゴールの思想内容とも深い関わりがあるように思う。次の章では、キルケゴールが論じた想起と反復の対比に注目し、仮名使用は反復と深い関わりがあることを示し、仮名人物を用いた著述方法は、キルケゴールが提示した「反復を中心とする学問」のひとつの実践であった、ということについて考えたい。

## 第2章 仮名使用の効果

1843 - 44年の時期に書かれた『反復』『哲学的断片』『不安の概念』という著作の中でキルケゴールは、一貫して反復と想起を対比させて論じている。そしてキルケゴールは想起を激しく批判する。なぜ想起は反復の対概念であるとされ、退けられたのだろうか。そもそも想起はプラトンが『メノン』などで提示した概念であるが、キルケゴールはそれをかなり拡大解釈して用いている。それは次の点からも明らかである。『不安の概念』序論でキルケゴールは諸学問の役割区分を行い、哲学を想起に基づくものと反復に基づくものに分けている。

第一哲学を異教的と呼びうる学問全体、つまりその本質が内在あるいはギリシア的に言って想起である学問全体と解し、第二哲学をその本質が超越あるいは反復である学問と解する。(IV 293)

ここでキルケゴールは、想起を中心とする学問を、プラトンの、あるいはギリシアの学問と



して限定するのではなく、もっと広い意味で用いている。

想起は永遠・真理をかつてあったものとして背後に設定し、それを思い起こすことで現在に呼び込むことである。これは真理や真実性や一般的なものの内在于しているものとみなし、それらには想起によってのみ達しようという考え方である。キルケゴールは、真理が決定的なものとして与えられるような学問、既成の真理をただ受け取るだけの学問を、想起を中心とする学問としている。そして、キルケゴールはヘーゲル哲学や神学に対しても、想起を中心とする学問だとして批判するのである。

この場合、キルケゴールが問題とするのは、想起する者と想起されるものとの関係である。想起する者に主体性はあるのだろうか。想起する者は想起されたものをそのまま受け取るだけなのだろうか。そこに内容豊かで充実した生があるといえるのだろうか。

キルケゴールの関心がどこにあるのかを示すものとして、学生時代の日記に次のような有名な一節がある。

実際私に欠けているのは、私は何をすべきかということについて私自身納得をすることであり、私が何を認識すべきかということについてではない。— 認識することであるがどの行動にも先行しなければならないのなら別であるが。私の使命を理解することが重要であり、私にさせねばならないと神が実際望んでいることは何なのかをわかることが重要である。私にとって真理である真理を見出すことが肝心だ。そのために私が生きたいと思ひ死にたいと思うイデーを見出すことが肝心だ。( I A 75)

この日記は 1835 年に書かれたものであり、『反復』の刊行より 8 年も前のものである。しかし、真理とどのように関わるかという点ではキルケゴールの態度は一貫していることが読み取れる。この文章は「私にとって」の真理を重要視しているが、これは相対的な真理のことを言っているのではない。私が主体的に関わり、私が生きてつかみ取った真理こそ重要であるといっているのである。だから、もし誰にでも妥当するような真理があるとしても、想起のようにその真理を上から与えられるだけであったり、それを思い起こして受け取るだけであったりするのならば何の意味もないことになる。想起には主体性が欠けていて、真理と想起する個人の生との結びつきが薄いのである。そのためキルケゴールは想起を退け、反復を提示するのである。

キルケゴールが提示する学問は、超越あるいは反復を本質とする学問である。では、反復とはどのような概念であるのかを簡単にみていこう<sup>ix</sup>。まず、キルケゴールは、私たちが生きる現実を時間的で無内容なものだとする。そして、それとは別に、超越的で豊かな永遠があると(IV 356)。そのうえで、このふたつのものが会合する「瞬間」があるのだとされる(IV 359)。ここまでは想起と同じであり、事実、キルケゴールは反復と想起を同じ構造のものだと述べている。しかし、反復と想起は方向性が異なり、想起が後方に向かうのに対し、反復

は前方に向かうのだとされる（Ⅲ 173）。つまり、想起では想起された永遠・真実性に重点が置かれるのに対し、反復では、永遠との触れ合いによって豊かにされた現実のほうに重点が置かれるのである。そして、永遠と時間が触れ合った「瞬間」を何度も繰り返し、私たちが生きる現実を豊かにすることが反復なのである。つまり反復を中心とした学問とは、超越的なものとの触れ合いを介して、現実を豊かなものとして主体的に反復するような学問のことなのである。

この例として、『反復』の若者のヨブ解釈をみてみよう。若者は、恋愛によって自己が引き裂かれるような苦悩の中で、ひたすら『ヨブ記』を読み続ける。そしてヨブの苦悩と試練について次のように述べる。

さて人はヨブの主張をどのように説明するでしょうか？説明は、全体は試練だ、というものです。しかしこの説明は新しい困難をあとに残します。（Ⅲ 243）

試練のカテゴリーは美的でも、倫理的でも、教義的でもなく、試練のカテゴリーは全く超越的です。知識がその位置を教義学の中に得るなら、ようやくそれはそれが試練であるという試練についての知識です。しかしこの知識が姿を現すやいなや、試練の弾力性は弱められてしまい、違うカテゴリーになります。このカテゴリーは完全に超越的であり、人間を神との純粹に個人的な対立関係に、二番手の説明では満足できないような性質の關係に置きます。このカテゴリーをどの機会でもすぐに手に取るたくさんの人間がいることは、彼らがそれを理解していなかったということを単に証明するだけです。（Ⅲ 244）

ヨブの物語は、普通試練であると解釈される。その点では若者の解釈は一般的なものである。しかし試練という解釈に至るまでがまったく異なっている。若者は、恋をしながらも恋人を愛していなかったということから責めを感じ、倫理的なものによっては解消できない状況に陥り自己を喪失していた。このとき若者は自らの境遇をヨブと重ね合わせる。ヨブは不条理な苦しみを受け、友人や妻たちからまったく理解されないという状況の中で、自己を保ち、神に赦されることで、すべてを取り戻した。若者が述べるように、試練は超越的なカテゴリーであり、個別的な体験を通じてでなければ、本当に理解することはできない。個別的な体験を通さず、知識として『ヨブ記』を読むのなら、ヨブを誤解してしまう。これが想起によるヨブ理解なのであり、若者のようなヨブ理解が反復によるものだといえるだろう。知識を受け取るだけであるならば、『ヨブ記』は単なる予定調和の物語としか理解されないだろう。ヨブの苦悩と試練を主体的に受け取り、生き直すこと、それが反復であり、本当の理解なのである。

では、具体的に、若者はどのような事態を瞬間とみなし、どのように反復を得たのであろうか。『反復』の最後の手紙の中で、若者は反復を得たと報告する。このとき反復のきっかけとなったこと、つまり瞬間にあたることは、若者のかつての恋人が結婚したという知らせ

であった。恋人を裏切り傷つけたという責めによって自己を喪失していた若者は、恋人の結婚を救い・赦しであると解釈し、かつての自己を取り戻すことになる。『ヨブ記』において、ヨブが試練の末に神から赦されたように、若者は恋人から赦され、苦しみから解放される。このとき若者は、以前と何ら変わらない自己を肯定的に受け取りなおす。そして、恋人から赦された決定的瞬間は、生涯にわたり繰り返し若者の生を豊かにしていくのである。これが若者の反復である。

この若者の反復は、キルケゴール自身の体験と非常に深い関係がある。そもそもキルケゴールが『反復』の草稿を書き上げた時点で、このような結末は予定されていなかった。草稿では、若者はヨブをたよりに反復を求めるが、決定的瞬間は訪れることなく、ピストル自殺してしまうという筋が用意されていた。草稿に関してヒルシュは次のように述べている。

これは、キルケゴールの『反復』がもともと悲劇的結末だったことを証明する箇所のひとつである。それは、愛する娘に対する関係の反復の不可能性が若者を死に追いやることを示すはずだった。キルケゴールは『反復』のもとの帰結を草稿から切り取り、草稿を保管する彼の習慣に反して、破棄した。<sup>xii</sup>

草稿を書き上げた時点で、キルケゴールは『反復』の若者同様に、かつての婚約者レギーネに対する責めの苦悩の中にあった。婚約を申し込んでおきながら一方的にそれを破棄することは倫理的に許されることなく、しかも婚約破棄の理由を明確に提示することができないということが、キルケゴールを自己が喪失されてしまうような苦しみの中に置くこととなった。レギーネとの関係を外的に反復すること、つまり、再び婚約関係に戻ること、あるいは婚約以前の関係に戻ることは、コンスタンティウスのベルリンへの反復実験旅行の失敗が示しているように、不可能なことである。キルケゴールが問題としたのは、内的な反復、つまり、自己の回復であった。しかし、そのきっかけとなる決定的瞬間を示すことができないため、草稿の段階では「反復は可能か」を読者に問いかけるのみで、若者には悲劇的結末が与えられていたのだと考えられる。

草稿が書き改められた理由もまた、キルケゴールに若者と同様の事態が起こったためである。『反復』の出版直前に、レギーネが婚約したという知らせがキルケゴールのもとに届いたのである。若者の最後の手紙には、自分を忘れてくれたかつての恋人に感謝し、女性の寛大さを讃える文章がみられる（Ⅲ 253）。レギーネの婚約の知らせに際し、キルケゴールも同様に感じたのであろう。レギーネの婚約をキルケゴールは救い・赦しであると解し、自己の回復が可能となった。そのため、瞬間を提示できないことから悲劇的結末で終わるはずだった『反復』が、まったく異なる結末へと急遽変更されたのである。

若者はヨブをたよりに反復を求めた。ヨブにおける瞬間・反復は、若者が得た瞬間・反復とまったく異なるもののように思われる。しかし、『ヨブ記』を読むことで、若者は自身の

個人的問題の中に、ヨブの場合と通じる問題があるのを見出し、その問題解決の手がかりを見出した。このヨブと若者の関係こそ、キルケゴールが著作によって読者との間に築こうとした関係である、と私は考える。このとき有効な方法として用いられたのが、複数の仮名人物による叙述である。人生観も価値観もまったく異なる複数の仮名人物たちが展開するさまざまな主張、対立の中から、読者は自らの個人的問題に通じる問題を見出し、その解決に真剣に向き合わされることになるのである。

だが、若者の例から明らかであるように、キルケゴールが構想した反復を中心とする学問は不可能なのである。というのも、反復や瞬間はあまりに個別的なことであり、反復を中心とした学問は、体系化して語ることができず、教えたり教えられたりということが不可能なのであるから。実際、反復を中心とした学問は構想にとどまり、キルケゴールの後期の仮名著作は小川が指摘していたように「ほんとうにいいたいと考えていた答えの方、つまり厳密な意味でのキリスト教を、上から、明確に、直接的に語らざるを得なくなった」のである。しかし、前期の仮名著作においては、キルケゴールの目指した読者を反復へと導く試みは成功しているというだろう。複数の仮名人物を用いた複雑な構成は、読者にさまざまな問いを突きつける。読者はその中から、自らの個人的問題と深いかわりのある問題を見出す。キルケゴールは、若者が『ヨブ記』を読んだように、読者がキルケゴールの著作を読み、主体的に問いに向かい、読者自身の生の問題に真剣に向き合うことを求める。そしてそこで得たものが、繰り返し読者の生を豊かにしていくことを求めるのである。キルケゴールはこのような意図をもって仮名人物を用いた著作を書き、実際に、『反復』はそうのように読むことができるのである。

## 参考文献

Sören Kierkegaard Gesammelte Werke, 5.und 6. Abt., Übers. von Emanuel Hirsch, Düsseldorf, 1955.

Sören Kierkegaard: Die Tagebücher, Bd. I, Übers. von Hayo Gerdes, Düsseldorf, 1962.

『反復』、榊田啓三郎訳、岩波文庫、1983年

和辻哲郎『ゼエレン・キエルケゴール』、筑摩書房、1947年

小川圭治『キルケゴール』、講談社、1979年

<sup>i</sup> キルケゴールの学生時代の恩師。コペンハーゲン大学の哲学教授であり、詩人でもあった。

<sup>ii</sup> 和辻『ゼエレン・キエルケゴール』p.121

<sup>iii</sup> 1840年にキルケゴールはレギーネに婚約を求め、承諾される。だが、翌年には一方的に婚約を解消する。キルケゴールは多くの著作でこの婚約破棄を取り上げ、そこから美と倫理と宗教の間の葛藤という問題を導き出している。

<sup>iv</sup> 小川『キルケゴール』p.152

<sup>v</sup> 『わが著作活動の視点』のこと。1848年に書かれた著作活動の回顧であるが、生前は出版されなかった。

<sup>vi</sup> 小川『キルケゴール』p.151-152

<sup>vii</sup> 同上 p.135、p.141

<sup>viii</sup> 榊田訳『反復』p.204

<sup>ix</sup> 同上、p.327

<sup>x</sup> キルケゴールはさまざまな著作で断片的に反復について語っているため、ここでは『反復』『哲学的断片』『不安の概念』などで述べられていることを総合して、反復がどのような概念であるのかを示す。

<sup>xi</sup> Sören Kierkegaard Gesammelte Werke, 5.und 6. Abt. p.150-153

<sup>xii</sup> 同上、p.150

